



# 神戸洋家具と KIITOの家具

KOBE WESTERN FURNITURE  
AND KIITO FURNITURE

デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) は、戦前に建てられた生糸検査所を改修した建物を拠点として2012年から活動を始めた。生糸検査所は、1927 (昭和2) 年に神戸市立生糸検査所として建設され、1932 (昭和7) 年に国立生糸検査所となる際に増築される。神戸港に近い神戸税関の向かいに位置し、日本で生産される生糸を世界各地に輸出する前の検査が行われた。建築されて90年ほどになるが、太平洋戦争時の神戸大空襲 (1945年) や阪神淡路大震災 (1995年) の際にも焼失や倒壊せず、現在に至っている。実際に生糸検査が行われていた体育館くらいの広さがある大きな作業場は、現在はホールとして各種イベントが開催される。会議室や経理部門などの事務室だった場所は、オフィススペースやギャラリーとして利用されている。

KIITOでは、検査所で使用されていた家具や検査機器などの一部を修復し再利用するなど、長い歴史の維持継承や保存活動に取り組んでいる。家具については、高級材を素材にしたキャビネットや衝立 (パーティション)、生糸検査時に使用された作業機などが現存する。2020年秋、かなり傷んでいたそれらの家具の修復作業が行われた。作業を行ったのは、木製家具やクラフト作品などを、デザインから製作販売まで手掛ける「うたたね」の山極博史さんと杉島郁子さん。修復作業するなかで、昭和初期の家具職人の工夫や想いなどが明らかになっていった。昭和初期というのは、神戸が開港した時代 (1868年、明治維新の頃) に製作が始まった神戸洋家具の成熟期にあたる。KIITOに現存する90年以上前に神戸の家具職人たちによって作られた家具を、神戸洋家具の歴史と文化についての考察も入れながら紹介する。



I

90年前の  
神戸洋家具職人の技と  
想いが伝わってくる、

## KIITOに現存する家具

2020年秋に修復された家具は10点。それぞれの家具について、修復を担当された山極さんのコメントを踏まえながら見ていきたい。

山極さんによれば、全体的に「丁寧にきっちり作るところと、手間をかけないで合理的に作業しているところがある。このメリハリを潔いと感じた。家具に装飾されたデザインには、当時の神戸や日本の洋家具の原点を感じさせるものがあった」と。材の接合部では、しっかりホゾ組みしている部分と釘打ちで留めている箇所などがある。使用材においても、マホガニーやチークなどの高級材と安価で入手しやすかった針葉樹材を使い分けている。一部の家具の部材には、組み立て時の位置を示すためにアルファベットの印が入っていた。海外から入ってきた家具の修復時に、このような印を見つけて真似てみたのではないかと。当時の職人が海外で製造された家具の修復などに携わり、構造などを研究していたことが推測できる。



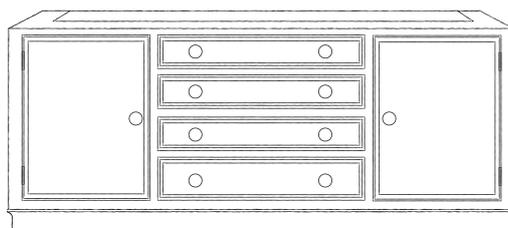
Photo: Jotaro Sakashita

- |               |                       |
|---------------|-----------------------|
| A キャビネットの下部   | E ガラス扉キャビネット（上部に扉鏡付き） |
| B 衝立（パーティション） | F ホールスタンド（楕円鏡付き）      |
| C ホールスタンド     | G ホールスタンド（四角形の鏡付き）    |
| D キャビネット      | H テーブル                |

修復した家具の概要と特記事項

\*サイズの項 w：横幅、d：奥行、h：高さ  
\*すべての家具で、修復時にワックスメンテナンスを行っている。

引き出しに、謎の金具。  
釘留め箇所には蟻型の埋め木



キャビネットの下部

- 材 | 前板、側板：チーク / 天板、底板：ラワン合板 / 引き出しの中：針葉樹(スギ?) / その他：タモ
- サイズ | w1815×d450×h755 mm
- 設置されていたと推測される場所 | 事務室
- 主な修復箇所 | 棚ダモの不足 → ダモの製作 / 引き出しのツマミ欠損 → ツマミの製作

1. このキャビネットの上に、別のキャビネットのようなものが置かれていたと思われる。

.....

2. 引き出しは割れなどが入っていたので、修復時に仕込み直し(分解して、新たに組み立て)した。ツマミの割れているものはブナ材で新たに作り直した。引き出しには、いくつかの特徴がある。

● 引き出し(4段すべて)下部の後ろ側に金具が付いている。長さ6cmで、幅2cmほど外側に金属製の薄板が飛び出して接合されている。薄板には、35mm×8mmの穴が開いている。4段の引き出しの金具の穴に紐や金棒などを通して、ストッパーにしたのではないかと考えられる。ただし、上の天板は固定されているので、どのようにして紐や金棒を穴に入れたのかは分からない。詳細は不明だが、当時の職人たちの工夫が見られる。<写真a>

● 引き出しの側板と前後の板の仕口(接合部)は釘打ちで留めている。ただし、前方の側板には、

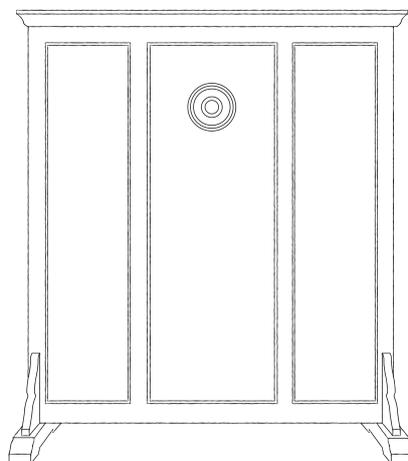
釘打ち箇所の上に蟻組みをかたどった薄板(厚さ7~8mm)を貼っている。強度の面からは、意味はない。後ろ側の仕口は釘打ちされたままになっている。引き出しを引いた際に、見える部分だけ蟻組みしたかのように見せているのだ。おそらく、職人としては、本当は蟻組みでしっかり作りたかったのだろう。しかし、何らかの事情で釘留めすることになったことに対して、せめてもの意地を見せたのかもしれない。

● 引き出しのツマミは埋め込み式。ツマミを前板にねじこんでから、内側からネジで留めている。マイナスネジを使用。当時はプラスネジ(ネジの頭が+になっている)がなかった。



修復した家具の概要と特記事項

使用済みの伝票が、  
左右の唐紙と合板の間に  
貼り付けられていた



衝立  
(パーテーション)

- 材|チーク(フレームの材)、合板(一部の突板はマホガニーの可能性あり)、唐紙
- サイズ|w1518×h1795 mm
- 設置されていたと推測される場所|所長室
- 主な修復箇所|上部周り縁部の割れ、破損→ 上部周り縁部の補修 / 脚部のぐらつき→ 脚部の補強 / 壁紙(表裏)の破れ→ 壁紙の一部張り替え

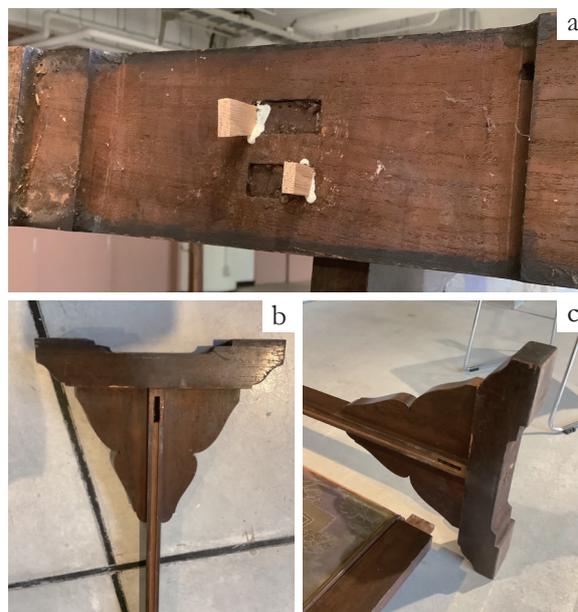
1. 全体に緩みがあってグラグラした状態だった。両端の脚部の裏側からクサビを打ち直して補修した。<写真a/b/c>

2. 最上部の横板(最大幅10 cm)が割れていたの  
で、外して修理。上部の横フレームと横をボンド  
で接着し、ネジを締め直した。

3. 両端の縦フレームと上下の横フレームの接合は  
ホゾ組み(フレームの厚み3 cm)。

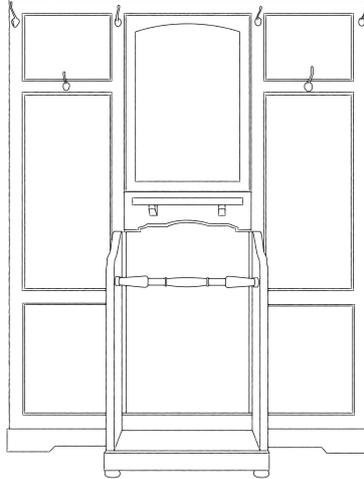
4. 左右に植物模様の唐紙が貼ってある。唐紙と  
合板の間には、使用済みの伝票や注文書(ビールの  
料金などが書かれていた)などが貼ってあった。  
新しい紙よりも使いふるした紙の方が乾燥してい  
るので、理にかなったやり方である。単にコスト  
削減で伝票を用いたわけではない。

5. 中央上部には、円形の装飾が施されている。他  
の家具にもこの円形装飾が施されているものがあ  
る(大きさは異なる)。おそらく、同じ部屋に置か  
れ、デザインを統一したのではないか。



修復した家具の概要と特記事項

昭和6年発行の新聞が…  
鏡と押さえ板の間に  
簡素な作り。材はナラ。



ホールスタンド

- 材|ナラ、一部ラワン? \*ナラの単板の間に、芯としてラワン材などが使われていた可能性がある。
- サイズ|w1365×h1725mm
- 設置されていたと推測される場所|事務室
- 主な修復箇所|自立が不安定→脚部の補強 / 外れかけていた鏡→鏡の補強

1. 事務室の入り口付近に置かれていたと思われる。他のホールスタンドやキャビネットに比べて簡素な作り。

(生糸検査所増築が完了したのが1932年)。  
<写真b>

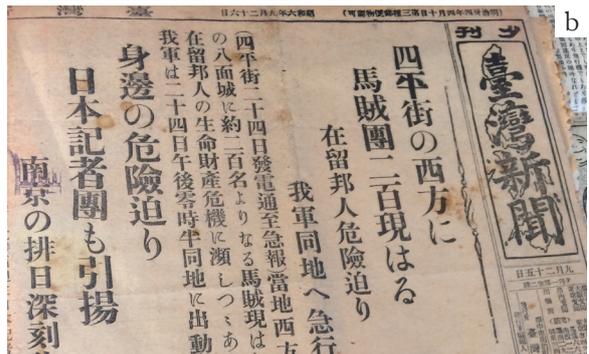
2. 所員が出かける際に、鏡でネクタイの結び目をチェックするなどしていたのではないか。

3. 鏡の下に、傘やステッキを置けるスペース(傘立て)がある。両側には帽子などを掛けるフックが付いている



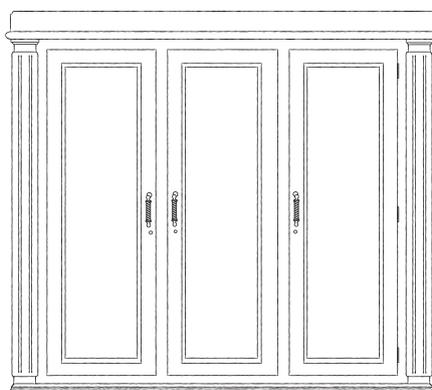
4. 傘立ての底板は金属製(銅)で、雨に濡れた傘に対応できるようになっている。上部のバーには装飾が施されている。<写真a>

5. 鏡と押さえ板の間には、古新聞が挟まれていた。新聞は1931(昭和6)年発行で満州事変についての記事が載っている。このことから、1931~32年頃に製作された家具であることが確認できる



修復した家具の概要と特記事項

本棚と思われるキャビネット。  
重たくてガラスも分厚い



※上部、扉に鏡付き、  
P4のキャビネットとセットではなし

キャビネット

- 材 | すべてチークの無垢材 (背板も可動式の棚も)
- サイズ | w1510×d360×h1400mm
- 設置されていたと推測される場所 | 役員クラスの部屋に置かれた本棚?
- 主な修復箇所 | 扉の不具合 (閉まりにくいなど)、軋み → 扉の調整、蝶番の取り替え / 外れかけていた背板 → 背板の補修 / 棚ダモの不足 → ダボの製作

1. 低い台の上に置かれていたと思われる。

.....  
2. 高級材のチークを使用し、他の家具に比べてかなり緻密な作りがなされている。製作されてから90年経っているが、狂いが少ない。良質の材を使用したという面もあるが、職人が丹精込めて仕上げたことがわかる。このようなことから、役員クラスの部屋に置かれていたと推測できる。

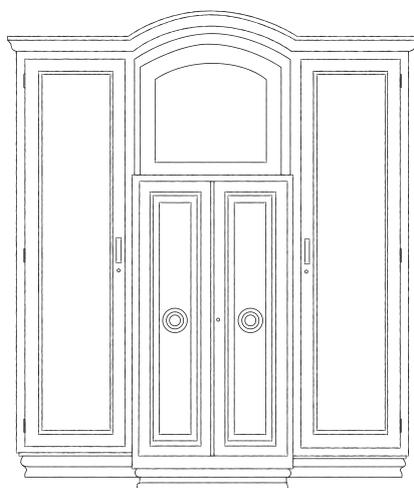
.....  
3. 鏡付きの扉が不具合になっていたので、修復時に蝶番部のズレなどを調整した。扉の取手は鋳物製で、凝ったデザインが施されている。<写真a>

.....  
4. 中に入っている棚板は2枚。



修復した家具の概要と特記事項

チーク材を贅沢に使用した、  
デザイン重視の家具



ガラス扉キャビネット  
(楕円鏡付き)

- 材|チーク
- サイズ|w1568×d390×h1830mm
- 設置されていたと推測される場所|書庫
- 主な修復箇所|背板の割れ→ 背板の補修 / 前面上部突板の浮き→ 突板の補修 / 左右の側板の割れ→ 側板の割れを補修 / 棚板と棚ダモの欠損→ 棚板と棚ダモの製作 / 閉まりにくい扉→ 扉の調整

1. チーク無垢材をふんだんに使っているため、かなり重たい。材料代だけでも、かなりの金額がかかっている。

2. 中央に観音開きの扉。中には棚がある。取手の位置が低いが、デザイン優先でこの位置にしたと思われる。

3. 両サイドの扉は鏡付き。中には棚がある。

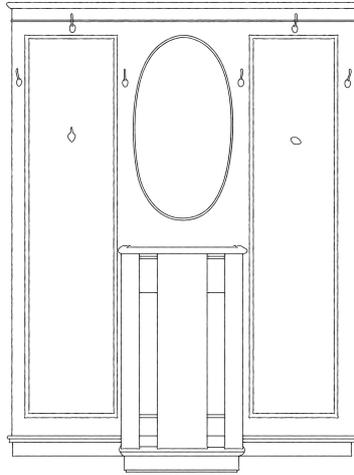
4. 正面から上部のアーチ型の屋根を見ると、左側は直線、中央部は緩やかなアール、右側は直線というデザインになっている。この部分は、無垢材を削り出している。屋根下の材を接いでいるところは、表面に薄板(これもチーク)を貼っている。経年変化で、一部すき間ができていた箇所があった。<写真a>

5. 扉の蝶番は真ちゅう製。しっかり作られていたが、少しゆがんでいたため、修復時に叩いて調整した。



修復した家具の概要と特記事項

高級家具  
チーク無垢材が使われている  
質のよい鏡や



ホールスタンド  
(楕円鏡付き)

- 材|チーク(ほぼ無垢材)、ナラ
- サイズ|w1360×h1820 mm
- 設置されていたと推測される場所|役員クラス、上級管理職の部屋
- 主な修復箇所|上部の角が欠損→欠損箇所の補修

1. 部屋の入口付近に置かれた。服装チェック用の鏡付き。中央下部には、傘やステッキを立てかける傘立てがしつらえてある。両サイドに帽子掛けのフックあり。<写真a>



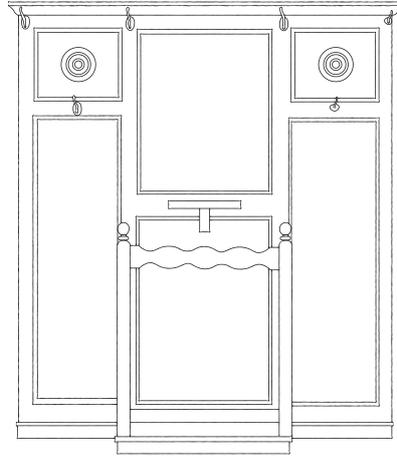
2. P6のホールスタンドとは異なり、高級材のチーク材を使用。両端の縦のフレームは、長さ181cm、厚み3.5cmの無垢材。鏡の質がよく(裏面がオレンジ色)、楕円形で模様入り。(P6のものは模様がなくシンプル)。一般的に、鏡は古くなってくると、縁の付近に水分が入って銀幕が侵されて曇って見えてくることが多い。この鏡は、90年経っても曇っていない。<写真b>



3. 楕円形の鏡の縁は、わずかにギザギザした跡が残っている。人の手で切ったと思われる。

修復した家具の概要と特記事項

両サイドの円形装飾が印象的な、  
所長室のチーク材家具



ホールスタンド  
(四角形の鏡付き)

- 材|チーク
- サイズ|w1580×h1768 mm
- 設置されていたと推測される場所|所長室
- 主な修復箇所|鏡の浮き上がり→ 鏡の付け直し / 棚のぐらつき→ 棚の付け直し / フックのぐらつき→ フックの固定  
脚部の割れや欠損→ 自立するように脚部を補強

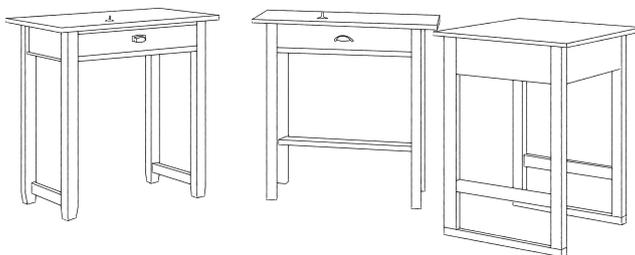
1. 部屋の入口付近に置かれた。鏡と傘立て付き。  
両サイドに円形の装飾があり、P5のパーテーションと同じ部屋に置かれたと思われる。<写真a>

2. チーク無垢材を使用し、かなり重たい。



修復した家具の概要と特記事項

生糸検査作業用机  
ナラ材で大量に作られた



テーブル

- 材|ナラ
- サイズ|①: w780×d450×h760 mm / ②: w755×d450×h760 mm / ③: w730×d515×h760 mm
- 設置されていたと推測される場所 | 肉眼検査室
- 主な修復箇所 |
  - ①(引き出し取手が四角) :  
脚や天板など全体のぐらつき → 脚部の組み直し、天板の固定 / 引き出しの受け木の欠損 → 引き出しの補強
  - ②(引き出し取手が半丸、天板にスイッチあり、補強のための横貫あり) :  
外れかけた天板 → 天板の固定 / 引き出しの内箱の割れ → 内箱の補修
  - ③(引き出しなし) : 全体的にガタガタした横揺れ → 揺れ防止のために貫を取り付け

1. 生糸の肉眼検査作業員用に大量に作られた。  
シンプルな構造。

.....  
2. 一部の天板には、照明器具のスイッチが残っていた。<写真 a>

.....  
3. グラグラしていた箇所を釘打ちで留めている箇所もあった。修復の際には、部材ごとに分解して組み直した。接合は、接着剤(ボンド)とビス留めで対応。ワックスを塗って仕上げた。<写真 b>

.....  
4. 「作業机といっても、何かこだわりがある。高級家具を手掛けている職人が作ったからかもしれない」(山極)



## KIITOの家具の特徴

---

### メリハリをつけた、 家具職人の仕事ぶり

力を入れるところや丁寧に仕上げるところと、作業効率優先での作りや簡素に仕上げるところとを使い分けながら職人が作業している。例えば、ホゾ組みでしっかり組む場合と釘留めにしている場合など。

家具の使用場所においても、力の入れ具合や予算のかけ方を使い分けている。役員クラスの部屋で使用する家具と職人が働く事務室で使用する家具は、明らかに作りが異なる。

---

### 良質な材を使用

所長室や役員クラスの部屋に置かれた家具の材には、チークやマホガニーなどの高級材が惜しげもなく使われている。作業机には、斑が出ている国産のナラ材が用いられている。見えないところには合板も使われているが、全体的に良質な材が集められている印象を受ける。

---

### 神戸洋家具の成熟期に 製作された 実用的な家具

神戸洋家具の約150年の歴史の中で、昭和初期は成熟期にあたる。家具業者や職人の数が多く、さまざまな分野の人たちが家具製作に携わっていた。製材、家具設計、家具の組み立て、塗装、木彫、鏡を含めたガラスなどである。

そういう成熟期（全盛期といってもよい）の神戸洋家具の技術やデザインの粋が凝縮されたものが、KIITOに現存する家具といえる。富裕層の邸宅で使われていたヨーロッパの伝統的な様式家具の流れをくむデザインの高級家具ではなく、生糸検査場という場所で使われていた実用的な家具という点に大きな価値がある。生糸検査所に家具を納めた家具業者は不明だが、各分野の職人たちが用途や予算を考えながら家具製作を行ったと思われる。



## II

### 神戸洋家具の 歴史と文化

KIITOに現存する家具について紹介してきたが、改めて神戸洋家具の歴史や特徴について考察していきたい。生糸検査所で使われていた家具（KIITOに現存する家具）が、どのようにして作られるようになったかを歴史的背景などを踏まえながら見ていこう。

## 日本の洋家具の歴史は神戸や横浜から始まった

近代日本における洋家具の製作は、1860年代の江戸末期から明治維新にかけての頃から始まっている。鎖国政策が終わって欧米諸国との交流が始まり、幕府関係の外国人応接用の家具が作られた。1860年頃、イギリス代理公使のヘンリー・ヒュースケンが東京・高輪の東禅寺に住んでいた時に、住職の知り合いの大工にロココ様式の椅子を作らせている。その後、東京の芝地域（高輪と隣接）で家具製作が行われていく。

1859年に横浜、長崎、函館が開港。68年には神戸も開港する。開港に伴い、横浜や神戸では、外国人居留地などに住む外国人向けの洋家具製作が行われていった（函館では1880年代後半から始まった）。

### 1) 横浜の洋家具

横浜では、1863（文久3）年にイギリス人のゴールドマンが、横浜・元町の馬具づくり師・原安造（通称：馬具安〔ばぐやす〕）に椅子の座の革張り修理を依頼した。その後、馬具づくりの経験や指物技術を生かして、外国から持ち込まれた家具を参考にしながら製作に取り組んでいく。弟子の養成にも尽力した。高台にあった外国人居留地の下に広がる元町周辺に、数多くの職人が集まった。

### 2) 東京・芝の洋家具

芝で洋家具製作の中心人物は、古谷庄八（尾張徳川家の御駕籠御用：かご職人）。慶応年間（1865～68年）に横浜で椅子づくりの修業をし、芝を拠点として椅子職人となる。息子の古谷豊吉が「本邦椅子製作の元祖」と称している。

明治初期から、官公庁や迎賓館で使用する洋家具が作られ始めた。一方で、中古家具の引き取りと修理後の販売をする中古品業者が、高級洋家具の製造も手掛けるようになる。東京周辺では、明治時代半ばから皇族の洋建築の邸宅（伏見宮

邸など）がいくつも建てられ、その邸宅に洋家具が置かれた。

### 3) 神戸洋家具の始まり

1868年頃に船大工系の眞木徳助、1872年に道具商系の永田良助が洋家具の製作販売を始めた。これらの二つの異なるタイプの家具関連業者によって、神戸洋家具は発展していく（詳細は後述）。

## 神戸洋家具を時代の変遷によって区分する

神戸洋家具は発祥から現在まで約150年の歴史を刻んでいる。この間の特徴や傾向などを、時代を区切って神戸洋家具の変遷をたどっていききたい。時代区分は、神戸芸術工科大学の佐野浩三教授が設定されたものに基づく\*。

\*発祥期から競争期までの6区分は佐野教授が設定。7つ目の区分（現在）は西川が追加。

### 1) 発祥期：

開港から明治20年初期  
(1868～89年頃)

#### －模倣の時代－

船大工や道具商が洋家具の製造販売などを手掛け始める。船大工系は、主に瀬戸内海の塩飽諸島(しわくしょとう)\*出身者の船大工たちが洋家具の修理や製作に携わった。道具商系は、外国人が持ち込んで使用していた家具を手放す際に引き取り(帰国時など)、それらを修理した後に転売するなどしていた(東京・芝の中古品業者と同じような業態)。

この時期は、「模倣の時代」「見よう見まねの時代」「試行錯誤の時代」と言える。外国から持ち込まれた様式家具(ロココ様式など)を分解や修理することによって、構造や素材などについて学んだ。

船大工系の代表格は、眞木徳助(創業は明治初期。1875年、加納町に眞木製作所設立)。道具商系の代表格は、永田良助(1872年、元町で永田良介商店創業)。

\*瀬戸内海に浮かぶ諸島。現在、香川県に属す。

### 2) 成長期：

明治20年代中頃から末期  
(1890～1911年頃)

#### －模倣から応用へ向かう時代－

明治初期から導入された、軍隊や学校などでの

洋風家具や椅子の使用が定着したこともあり、洋家具が広がっていった時代である。見よう見まねの家具製作から脱却していく。製造卸売と仕入販売を専門業態とする新規事業者が増える。1909年には、神戸市西洋家具商組合が設立。

### 3) 変革期：

大正期(1912～26年頃)

#### －設計士の登場と技術向上の時代－

神戸や阪神間で洋風建築が増加し、洋風の生活様式が富裕層を中心に広まっていった。市場需要の増加にともない、洋家具は多様化していく。

それに呼応するように、明治後期に設立された京都高等工芸学校(現、京都工芸繊維大学)などで学んだ人たちが、洋家具のデザインに取り組むようになる。このような設計士の登場、家具製作の技術向上などが相まって、神戸洋家具は国内の大都市圏にも販路が拡大する。

1924年、フランク・ロイド・ライトや弟子の遠藤新たちの設計による山邑邸(芦屋。現、ヨドコウ迎賓館)が竣工。永田良介商店が家具の製造を請け負った。

### 4) 成熟期：

第二次世界大戦までの昭和前期

(1927～41年頃)

#### －神戸洋家具の全盛期－

明治初期から60年以上の経験を踏まえ、技術とデザインの融合による、レベルの高い家具が生み出された。日本の空間や日本人の体形に合わせたシンプルな家具も作られている。

神戸洋家具産業に携わる事業者は、少なくとも131件以上あり(佐野教授調べ)、神戸洋家具の歴史の中で全盛期を迎える。ジェームズ邸(塩屋)、雲仙観光ホテル(長崎県)、乾邸(住吉)など、

現存する名建築に納める家具が作られた。この時期に、生糸検査所（現、KIITO）の家具が製作されている。

### 5) 復興期：

終戦直後から昭和20年代末

(1945～54年頃)

－戦後復興の時代－

大空襲による被害などで神戸洋家具産業は壊滅状態に陥った。戦後まもなく進駐してきた連合軍の家族住宅用家具の生産をきっかけに、少しずつ復興していった。

### 6) 競争期：

昭和30年代から昭和末期

(1955～85年頃)

－日本の高度経済成長期－

昭和30年代以降、高度成長期を背景に家具需要は急増する。神戸洋家具産業が発展するなか、家具工場が集まっていた神戸市中心部（当時の生田区、葺合区）では工場拡張が難しくなる。近隣の住宅や商業店舗に影響する騒音や公害なども問題になり始める。そこで、昭和40（1965）年に団地協同組合神戸木工センターが結成され、昭和44（1969）年に当時の垂水区多聞町に工業団地が竣工。多くの家具関係の製作所が移転した。

### 7) 現在：

昭和から平成、令和へ

(1986年以降)

－バブル崩壊、阪神淡路大震災を経て、令和の時代へ－

1990年代初めのバブル崩壊や95年の阪神淡路大震災などを機に、神戸洋家具産業は後継者

難も重なり低迷期に入る。老舗の家具メーカーの廃業などが続いた。

令和の時代になり、競争期に比べて事業者数は減ってはいるが、永田良介商店を中心に神戸洋家具は根強い人気を持続している。現在、木工団地をはじめ、中央区二宮付近などで、箱物製作、椅子製作、塗装、椅子張り、木彫などの事業者が家具づくりに携わっている（推定、約20件）。

また、伝統的な神戸洋家具のテイストとは異なるが、個人の木工家が神戸市内や周辺地域（丹波篠山、三田、三木、淡路島など）を拠点にして、それぞれの個性を生かした家具づくりを行っている。

## 生糸検査所の家具が作られた頃の神戸洋家具

前述した「成熟期」の項に、昭和初期の生糸検査所の家具が作られた時代について簡単に記しているが、もう少し詳しくその時代の特徴と背景を記述しておく。

### 1) 神戸特有の社会背景

当時、国際的な神戸の洋風文化と大阪の伝統文化（上方文化、和風テイストがある）が併存する、独特の生活様式を持った地域文化が大阪から神戸にかけてのエリア（阪神間）で成熟していた。神戸圏の郊外住宅地に、文化人や主に大阪で事業活動する財界人の邸宅・別荘などが建てられ、他の地域では見られない「阪神間モダニズム」といわれる文化の定着が見られた（東京の田園調布の開発にも影響を及ぼした）。

### 2) 製作技術とデザイン力のレベルアップ

明治初期以来の家具製作経験を踏まえての技術の向上とデザイン力のアップを連携させ、顧客ニーズに対応していた。背景としては、ヨーロッパの最先端の家具デザイン情報の収集、ヴォーリズ建築事務所からの専門知識や設計・デザインの手法や考え方の吸収などが考えられる。

永田良介商店三代目の永田善従（京都高等工芸学校卒業）は、1930年に渡欧。ドイツでのバウハウスの視察をはじめスウェーデンにも足を延ばし、ヨーロッパの家具事情を視察している。帰国後、バウハウスの構成主義などを家具デザインに取り入れた。

### 3) 生産額が急増し過去最高に

事業者数が増えるとともに、神戸洋家具の生産額は、全体で変革期（大正時代）に比べて4倍以上に達し、急激に市場が拡大した。記録に残っている事業者数は131件だが、おそらく200件以上の事業者が存在していたと推察される（佐野教

授が調査を基に推測）。

### 4) 「日本住宅向き西洋家具」の誕生

ヨーロッパの伝統的な様式家具をベースにしながらも、顧客ニーズに応じたデザインを手掛けること（例：ジェームズ邸、乾邸などの西洋式建築に納めた家具）や、日本での使用環境や使用者の体格などを考慮することなどを行った。その結果、従来の神戸洋家具よりもデザインがシンプルになっていく。さらに、家具の大きさを小型化し（サイズを小さめに）、これにより実用的な家具が生まれていった。

## 神戸洋家具の定義と特徴

神戸洋家具といっても、決まった定義というものはない。あえて言えば、「神戸で作られてきた洋家具」ということになる。しかし、神戸洋家具という言葉からは、独特の洋家具のテイストが思い浮かんでくる。デザインや風土などの面から神戸洋家具のポイントをまとめておく。

### 1) デザイン

明治時代初期に海外から持ち込まれた家具の多くは、ヨーロッパの様式家具だった。ロココ様式、ルネサンス様式、イギリスのジョージアン様式、ヴィクトリアン様式など。高級材を用いて、座は布張り。見た目には曲線が目立つ。

大正時代から昭和にかけては、アール・デコ調やバウハウスの影響を受けた家具も見られる。直線が多用したデザインも増えた。このように、特定の様式やデザインに限定されていない。

### 2) 素材

神戸洋家具では、使用場所によって大きく分けて二つのタイプに分けられる。一つは、富裕層の邸宅や別荘に納められた高級家具。チークやマホガニーなどの外国産高級材が数多く用いられた。

もう一つは、官公庁や会社で使われた実用的な家具。組織のトップクラスの部屋に置く家具には高級材が使用されたと思われるが、実務スペースには様々な国産材（ナラなど）や合板（ラワンなどを使用）が用いられたと推測する。KIITOの家具は、まさにこのタイプにあてはまる。

### 3) 塗装

神戸洋家具の塗装の特徴は、全体的に深みのある色が基調になっていることである。これは、高級材のチーク材などが使われたことにもよるが、永田良介商店三代目の永田善従が開発したとされる「墨ぼかし」の技法によるところが大きい。

これは、材に水と混ぜた砥の粉を塗ってから（道管にすり込む）墨を塗り、乾燥し研いだ後にラッカーを塗るという技法。この作業を繰り返すことで、色の濃さが変わってくる。神戸洋家具は、落ち着いた重厚な雰囲気醸し出す家具というイメージが定着している。

### 4) 分業による家具製作

家具の製作は、基本的には分業で行われた。椅子の組み立て、箱物（キャビネットなど）の組み立て、椅子の座張り、木彫、塗装など、それぞれの専門分野の職人が手掛けていた（“渡り職人”もいただろう）。デザインについては、初期の頃を除いて設計士が担当した。注文を受けた家具業者が、それぞれの専門分野の人たちに仕事を依頼するという形態である。

大手の家具業者では、家具工房を直営しているところもあった。ただし、工房内で一つの家具をすべて一人で作り上げるということは、ほとんどなかったと思われる。KIITOの家具を請け負った家具業者は不明だが、各工程で腕利きの職人が関わったことは間違いない。

### 5) 風土と文化

神戸洋家具の大きな要素として、神戸圏の文化と上方文化が融合して醸し出すもの（独特の雰囲気）が備わっていることにある。いわゆる、阪神間モダニズムとも呼ばれるものだ。

ヨーロッパの様式家具やウィンザーチェアなどから影響を受けながら、日本人の生活に合うように家具がアレンジされていく。そこに、明治維新の頃に開港した神戸の地域性や独特の文化というものが影響を及ぼしている。他の産地には見られない文化的背景があると考えられる。KIITOに現存する家具は、この要素を受け継いだものと言えるだろう。

<主な参考文献>

『神戸洋家具産業の歴史と自然発生的デザインの有用性』  
(佐野浩三・神戸芸術工科大学教授〔プロダクト・インテリアデザイン学科〕による論文、2018年)『室内と家具の歴史』  
(小泉和子、中公文庫、2005年)『新版 名作椅子の由来  
図典』(西川栄明、誠文堂新光社、2021年)

編著：西川栄明

デザイン：paragram

発行：デザイン・クリエイティブセンター神戸

〒651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4

本書の無断複写、転載、複製を禁じます。

©Design and Creative Center Kobe ALL rights reserved.

## 神戸洋家具とKIITOの家具

ゲスト

佐野浩三（さの・ひろぞう）

神戸芸術工科大学教授

1960年生。京都工芸繊維大学大学院修士課程修了。博士（芸術工学）／工学修士。建築事務所勤務を経てデザイン事務所設立後、神戸芸術工科大学入職。専門はインテリアデザイン。2004年から神戸洋家具産業についての研究を継続している。現在の研究テーマは、「パナキュラーデザイン」。

ゲスト

山極博史（やまぎわ・ひろふみ）

家具デザイナー

1970年、大阪生まれ。宝塚造形芸術大学産業デザイン科卒業。カリモク家具株式会社にて商品開発に携わり、その後長野の松本技術専門校にて家具製作を学ぶ。工房でのアシスタント等を経て、1999年「うたたね」を立ち上げ。コミュニケーションを大切に、手で考え、手でデザインし、日常に溶け込む家具や生活道具を生み出す。商品開発やデザインプロデュース、ワークショップや勉強会などを通じて、モノ作りを伝える活動にも取り組んでいる。第2回、第5回「暮らしの中の木の椅子展」など、コンペでの受賞も多数。元・生糸検査所にあったものから、KIITO CAFEのツールをデザイン、製作した。

インタビュアー

西川栄明（にしかわ・たかあき）

編集者 / 椅子研究者

1955年、神戸市生まれ。椅子や家具に関すること、森林や木材から木工芸に至るまでの木に関することなどを主なテーマにして、編集執筆活動を行っている。著書に、『新版名作椅子の由来図典』『樹木と木材の図鑑－日本の有用種101』『この椅子が一番！』『木のものづくり探訪』『増補改訂 一生つきあえる木の家具と器－関西の木匠28人の工房から』など。共著に、『名作椅子の解体新書』『Yチェアの秘密』『ウィンザーチェア大全』『増補改訂 木材加工面がわかる樹種事典』『漆塗りの技法書』『木育の本』など。企画編集に、『流れがわかる！ デンマーク家具のデザイン史』など。

---

「生糸検査所時代の家具から紐解く、  
神戸家具の歴史と文化」

2021年8月24日（火）19時～21時

KIITO 1F GALLERY A

ゲスト：佐野浩三（神戸芸術工科大学） / 山極博史（うたたね）

インタビュアー：西川栄明（編集者・椅子研究者）

主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸

**KIITO:**